

■ 書 評



「うつ」の舞台

内海 健, 神庭重信 編
 弘文堂
 2018年7月 220頁
 本体価格 3,200円+税

本書は、神庭重信先生、内海健先生の編集の「うつ」シリーズの第2弾である。

前作は『「うつ」の構造』という2011年の書物としては古めかしいタイトルであった。DSMの誤った使い方が跋扈し、新型うつ病などという言葉が流行っていたときであったので、「構造」に踏み込む内容になったのではないかと推測される。本書の出版社の弘文堂は、『躁うつ病の精神病理』を発刊しており、そのシリーズに対するオマージュも強かった。こちらについては加藤敏先生の書評が本誌114巻2号(2012年)に掲載されている。

さて、本書は、「舞台」という意味深長なタイトルがついている。この「舞台」という言葉は、前作の内海先生の『「うつ」の構造変動』の中で、「超越論的審級が衰弱し、舞台そのものが根本的な変容をこうむったとき、うつ病にはどのような変化がもたらされるだろうか」と次の問題意識として提示されていた。オペラ(舞台)で喩えるならば、台本、楽譜は同じでも、演出、指揮、舞台芸術、歌手・役者などによって、全く異なる作品になるのと同様なことが「うつ」にもおきるということであろう。それを照らし出すために、I. 社会の中のうつ、II. 心理的アプローチ、III. 生物学の最先端、IV. 文化と精神の4部構成となっている。

「社会の中のうつ」では、斎藤環先生が「若者心性」からみた「うつ」は、SNSなどに象徴される「承認依存」が背景にあり、「承認の不安」が自己愛の傷つきによるうつ状態をもたらしていると指摘する。このような背景のあるうつ病の治療として、身体性の回復が必須であり、「対話」の重要性を提示している。内海先生は、同じキー概念である自己愛を精神病理学的な立

場から展開する。他者への一体感の幻想、分離の傷とその否認を、臨床でよく遭遇する事例をもとに「なるほど」と解き明かしてくれている。

「心理的アプローチ」では、精神分析(藤山直樹先生)、対人関係療法(水島広子先生)が取り上げられている。構造化された精神療法が「うつ」を理解する上で意義深いことがよくわかる。これは、次の「生物学の最先端」とは探求する階層はちがうものの精神疾患の「本質」に迫るという意味で構造化された精神療法が寄与するところが大きい。

「生物学の最先端」は、加藤忠史先生と森信繁先生の登場である。加藤先生は、神経生物学研究の歴史と未解明さ(だからこそ、研究するのだ)を示す。安易な似非生物学的言説を許さない科学への厳しさを感じ得るのであろう。森信先生は、遺伝子の塩基配列の変化を伴わない機序での遺伝子発現の変化を研究するエピジェネティクス研究の最前線を豊富な自己の研究成果をもとにDNAメチル化の変化を論述されている。うつ病の診断マーカーのみならず、治療によって末梢血DNA解析で変化をみるといった治療の指標の可能性を示唆され、とても刺激的である。神経生物学的研究を発展させるための基盤整備は本学会の重要な役割と考える。

最終章の「文化と精神」では、豊嶋良一先生が診断学の根本を詳述した上で、進化、社会的変化と抑うつについて展開されている。神庭先生は、「人はなぜうつになるのか」という疑問を起点として、進化論的視点から、うつは援助希求シグナルの側面があると指摘し、適応としてうつをとらえる試みを提示している。この視点は、『うつ病の行動遺伝学的構造』(2005年)、『うつ病の論理と臨床』(弘文堂)収載、前書の『文化一脳・高次精神の協働構成とうつ病の形相』を併せて読むとより理解が深まるであろう。

本書は、ワークショップをまとめたもので、『躁うつ病の精神病理』以来の伝統が踏襲されている。精神疾患の理解、解明には、一つのディシプリンの深化とともに、研究分野を超えた相互交流(対話)が重要である。本シリーズが定期的な出版されることを切に願うのは、書評子だけではないであろう。

(細田眞司)